４．個の支援につながる

(1) 特別支援教育と１人１台端末

１．特別支援学校学習指導要領では

各教科の指導計画の作成に当たっての配慮事項として、障害種ごとにコンピュータ等の ICT の活用に関する規定を示し指導方法の工夫を行うことや、指導の効果を高めることを求めています。特別支援教育では障害種別にかかわらず、ファーストステップとして「すぐに」「誰でも」「どの教科でも」使える道具として ICT を活用する能力を身に付け、児童生徒自身が学びを調整する力を育みます。

２．特別支援教育の指導において ICT（１人１台端末）を活用する際の視点

○　教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするために、ICT を活用する視点
○　自立活動として障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために ICT を活用する視点

３．１人１台端末の活用例

読み書きの困難さへの活用　通常の学級・通級指導教室・特別支援学級

読み困難	書き困難
【困難さ】聞くことはできるが読むことが困難であるため、教科書の内容やプリントの内容を理解することが難しい。 【ICT の活用】文字情報を音声化する。 【得られる効果】情報収集の幅が広がる。文字情報を理解できる。	【困難さ】話すことはできるが書くことが困難であるため、作文や感想を書くことが難しい。 【ICT の活用】音声やキーボード等を利用して入力する。写真で撮る。 【得られる効果】ノートをとることができる。作文や感想を書くことができる。

【利用例　音声読み上げ・音声入力機能を設定する　】

①画面右下の時計を選択する

②設定マークを選択する

③詳細設定を選択する

④ユーザー補助機能を選択する

⑤音声入力をオン

⑥読み上げをオン

⑦画面右下にアイコンが出ます

【設定完了】

【利用例　音声で文字情報を入力する】

①入力する場所をタップまたは選択します。

②音声入力を選択します。

③文字を入力する場所では、ほとんどの場合、音声入力も使用できます。「句点」、「読点」、「疑問符」、「感嘆符」と話して句読点を追加することもできます。

【利用例　音声読み上げ】

①音声読み上げを選択します。

②読み上げたい場所をタップまたは選択します。

③選択した部分が Chromebook で読み上げられ、個々の単語がハイライト表示されます。
読み上げの途中で「選択して読み上げ」を終了するには、Ctrl キーまたは検索キーを押します。

【利用例　板書を写真で撮る・画面を記録する】

字を書くのに時間がかかる場合は写真で情報を保存します。

写真を撮影する→Chromebook p.26 参照

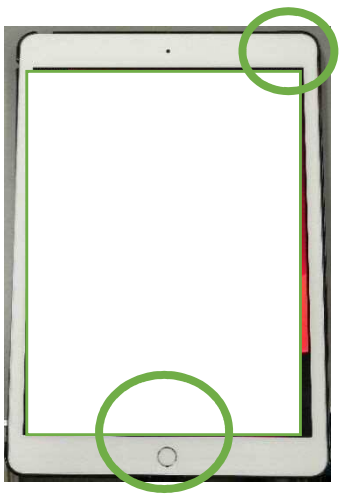
→iPad p.32 参照

画面を画像として記録することをスクリーンショットと言います。

スクリーンショットを撮影する

→iPad 電源ボタン＋ホームボタン

→Chromebook　Ctrl＋ ボタン



意思を伝える困難さへの活用　特別支援学級・特別支援学校

(困難さ)自分で的確な言葉を選んで気持ちを伝えることが難しい。

(ICT の活用)絵カードの選択、メールの利用

(得られる効果)自分の気持ちを伝えることができる。

【利用例】気持ちや行動を表す画像を保存してコミュニケーションに利用する

①Google で　画像検索をします。検索ワード例「うれしい　イラスト」

②写真を保存する。スクリーンショットでトリミングも可能。

③Google スライドを利用して児童・生徒が行動や気持ちを選択する。

話を聞く困難さへの活用　通常の学級・通級指導教室・特別支援学級

(困難さ)聴覚情報の活用が難しく、言葉で説明されても理解できない。または忘れてしまう。

(ICT の活用)動画で確認する・手順をメモする・音声レコーダーとして動画を活用する

(得られる効果)次に何をするのか理解できる。一人で作業を達成できる。

【利用例】　忘れないように動画を利用する

①動画を撮影する

②必要に応じて繰り返し動画で確認する。

＊音声レコーダーとして動画を利用することもできます。

不安感への活用　通級指導教室・特別支援学級・特別支援学校

(困難さ)見通しが持てないと落ち着かない。初めての場所が苦手である。いつ終るのかが不明確で集中が続かない。
(ICT の活用)画像や動画で確認する・タイマーを利用する
(得られる効果)事前に確認することで安心して活動できる。

【利用例】　初めての学校行事の見通しをもつ

①保存写真から、児童生徒にとって見通しが持てる画像や動画を選ぶ。
②選択した画像を撮影する。
③Google スライドを利用して行事の流れを保存する。
④児童・生徒と作成した Google スライドを見ながら行事の流れを確認する。
・行事内容の理解が難しい場合は YouTube を利用して動画を見ることも有効です。

下学年の学習内容理解への活用　特別支援学級

(困難さ)当該学年の学習内容の理解が難しい
(ICT の活用)本人にあった学習内容を選んで学ぶ
(得られる効果)本人の学びに応じて個別に学ぶことができる

【利用例】　児童・生徒が下学年の学習内容を学ぶ

①NHK for School を利用して、動画で事前学習する。
②理解できたことや、新しく知ったことを Google　ドキュメントにまとめてみる。
＊文字入力が苦手な児童生徒は音声入力を利用してみましょう。
③知識の定着を確認する。P.50　ドリルパークを利用する。
・ドリルパークはこれまでの学習をさかのぼって学べる内容が豊富にあります。自分で学習を進めることもできますので、復習や定着に有効です。
・各教科の学習状況の把握に活かすことができます。

(2)日本語指導が必要な児童生徒への支援

1. 日本語指導における ICT 活用の考え方

日本語の支援が必要な児童生徒にとって、直接的なかかわりの中で学ぶ日本語が効果的であることは言うまでもありませんが、**①コミュニケーションの支援ツールとしての活用**、**②語彙を増やしたり理解を深めたりするための活用**、**③学習コンテンツの活用**等、様々な場面で ICT を使って支援を充実させることができます。その例を掲載します。

2. 活用例

①コミュニケーションの支援ツールとしての活用　Google 翻訳等の翻訳機能

○意思表示の支援

・日本語でのコミュニケーションに不安がある児童生徒への支援に Google 翻訳等の使用が有効な場合があります。特に入学当初は自己表現が難しいこともあるので、気持ちや考えを表現する手段として活用してみましょう。

・友達とのコミュニケーションや体調不良の際の伝達(保健室)、保護者との連絡等でも活用が期待できます。

＜使い方のポイント＞

・短い文で主語と述語をはっきりとすることで翻訳の精度が増し、伝わりやすくなります。

・正確性に不安があることを考慮して、翻訳に頼りすぎないことも大切です。日本語の学びにつなげていくことも意識していきましょう。

②語彙を増やしたり理解を深めたりするための活用　データや ICT の特性を活用した学び

○一人一人に応じた支援の推進

・語彙を増やしたり理解を深めたりする学習として、日本語を母語に変換したり、学習で出てきた言葉を絵や図で表したりする時に活用すると効果的です。

・国語教科書の指導書には、物語等のルビ付きデータが入っています。端末で使用して音読や文章理解の助けにすることができます。ワークシート等も有効に活用しましょう。

＜使い方の例＞

・教科書や指導書等のデータや画像を使用して理解を深めていきます。自主的な学習としても活用します。

・文字の修正がしやすい点を生かして、短文作りや作文などで、表記や語順等の学習を行います。

③学習コンテンツの活用　日本語学習サイト・ドリルパーク等

○インターネット上のコンテンツを用いた学び

・インターネット上には、日本語の語彙を増やしたり、日常会話の仕方を動画で学んだりするコンテンツがあります。個別学習や学習教材として使用するなど、 個の実態に応じて活用しましょう。

- 国際交流基金 「エリンが挑戦 にほんごできます」
- NHKの「NEWS WEB EASY」「やさしい日本語会話レッスン」「NHK for School」など。

○ドリルパークの活用

・これまでの学習をさかのぼって学べる内容が豊富にあります。自分で学習を進めることもできますので、復習や学習の定着に有効です。

・国語以外の教科も学ぶことができます。理解度が確認できるので学習状況の把握に生かすことができます。

(3) 不登校児童生徒への支援

１.不登校児童生徒への支援についての考え方

（１）支援についての考え方

病気やケガでの欠席とは違い、不登校の背景、要因はさまざまであり、児童生徒一人ひとりに寄り添った支援をすることが重要です。

GIGA 端末を利用することで、学校に登校することができない児童生徒と連絡をとりあったり、その子にあった学習支援を行ったりするための手段の幅が広がることが考えられます。特に、ICT が得意であったり、興味があったりする子の場合は、その子に合わせて効果的に GIGA 端末を利用し、学びを深めたり、自信をつけたりすることで、再び学校に登校できるようになる可能性も十分にあります。

しかし、不登校経験者から話を聞くと、学校に行けなかった時期は「周りの人には何もしないでほしかった。」や「勉強をする気力なんてなかった。」などという意見もあり、子どもによっては、学校に行けない間に、休養したり、現状の不安や心配事から一旦離れ、ゆっくりと自分を見つめ直したりしている場合があることに留意する必要があります。教員からの一方的な連絡や学習機会の提供が本人を追い詰めることにならないよう、状況を多角的に把握し、本人の意向を尊重しながら支援していきましょう。

これからの社会を考えた場合、全ての子どもたちが、コンピュータの操作スキルを向上させ、使い方に慣れていく必要があります。しかし、不登校児童生徒の場合は、スキルの向上と同時に、自分の良さや人の温かみを感じられる感情交流が特に必要です。端末同士のつながりだけでは、気持ちがなかなか伝わらない部分もありますので、足りない部分を家庭訪問等で継続的に補ったり、保健室・別室等への登校や放課後登校につなげたりして、対面での支援につながるようにしていきましょう。

教員や保護者の安心感のための支援ではなく、本人の安心感が高まるよう、本人の学ぶ意欲や習熟度、興味・関心、学習環境、その時の心の状況などをしっかりと把握しながら、本人に寄り添った支援になるように心がけましょう。

（２）支援を考えるうえでの視点

・これまでの支援を引き続き大切にしながら、子どもとつながる手段をより豊かにするために ICT を利用する。
・子どもの状況に応じた最適な手段として ICT がふさわしいか確認する。ICT は道具の１つ。
・ICT は登校や家庭訪問など、直接会うことができる機会の間を補うために利用するという意識で。
・端末でのやりとりの方が、電話やプリント学習等よりも楽である子もいる。
・ICT を使うことで適度な距離で、関係作りができる場合がある。
・ICT だからといって人間的な温かみを感じづらいわけではないが、工夫は必要。
・家庭内の ICT 環境を確認して、使い方については保護者の同意が必要。